

## 興教大師とは

—御遠忌伝道、教化の視点から—

小山典勇

- 一、八百五十年御遠忌の意味は何か
- 二、興教大師は何故親しみにいくのか
- 三、興教大師が直面した問題は何か
- 四、我々が直面している問題は何か

はじめに

御遠忌を明年に迎える現今、いまさらの感がないでもないが、本論は教化の立場から特集興教大師研究に（研究会に出席しなかったので）論文だけで急いで参加することになり、私見を取り急ぎまとめたものである。

興教大師とは、と問い合わせるために①今回の御遠忌はどんな意味をもつてているのか、そして、我々は教化活動を進めることでさまざまな問題に当面するが②興教大師はどんな問題に直面し、対処したのか、その切り札は何であったのか

か、そこから③我々が興教大師に学ぶものについてを論点として考察する。

智山伝法院では「現代化」をテーマに各方面から研究に取り組んでいる。本論もそれにともなう問題提起の一つとして、教化の立場から宗団の現状と問題点を批判的に論じていくことにする。

### 一、八百五十年御遠忌の意味は何か

今回の興教大師・覚鑁上人八百五十年御遠忌は、我々に色々な問題があることを示した。例えば「興教大師は一般には知られていない方である、だからどうも盛り上がりに欠ける」「弘法大師の時から十年も経たないのだから、今度は檀家に寄付を頼みにくい……」という声が聞こえてきている。

それならば、興教大師が知られていないのであれば、知らせればよいのである。それができないことに問題の根深さがある。何故なのか、その答えは簡単である。興教大師に関する情報が不足しているからである。情報不足・勉強不足の理由について、各種の研修会参加者の意見によると、大学で講義を受けていない、講習会などで興教大師がテーマになかったから、が大半を占めている。<sup>(1)</sup>

それでは先の弘法大師の一千五百周年御遠忌はどうだったのか、思い出してみよう。我々教師が本当に努力したので一千五百周年御遠忌は盛り上がったのだろうか。それよりもオカルト、密教ブームなど世間の流行の中で弘法大師や真言密教が注目され、そこに我々の御遠忌が巻き込まれて行ったのではないだろうか。外からの大きなうねりに煽られるようにして御遠忌事業が進んだのだと受け止めるべきであろう。

また御遠忌は本堂・境内をはじめ寺院の環境整備を図る大きな口実になった。御遠忌という柳の下に、環境整備といふドジョウを寺院側は用意したのである。こうしてハード面の整備が進んだことは、六十年総合調査の結果が示す

ところである。<sup>(2)</sup>

ところが今度の興教大師八百五十年御遠忌では、二四日のドジヨウを狙おうとしても、檀信徒が飛びつくだけのいいものを提示できないまま、そうして宗団一致の盛り上がりを欠いたまま、御遠忌を迎えることになってしまった、これが実情であろう。

盛り上がりを鈍らせた理由の一つに懺悔の問題がある。【密厳院発露懺悔文】の扱い方である。「懺悔は他人に強要するものではない、自分自身に課す問題である」などの意見が強くなつた。まさに正論である。そこで今回の御遠忌は檀信徒のものではなく「教師の自己研鑽の御遠忌」にすべきであるという声が大勢となつたようである。

ここに二、三の疑問が生じる。第一の疑問は懺悔の扱い方である。懺悔の文は寺院や教師に都合が悪いからテーマから外そうとする姿勢や取り組みに問題はないのか。現代人に懺悔の問題あるいは自己批判の意識が必要か・そうでないか、これを選択の基準とすべきではないのか。第二の疑問は教師の自己研鑽として何に取り組むのか、その内容が明らかでないことだ。住職・教師あるいは寺院のどこに問題ありとして自己研鑽しようとするのか、掛け声ばかりで方向が見えてこない。それでは「檀信徒と共に」の合言葉はどうなるのか、五十年に一度の勝縁と叫んだ狙いは何であつたのか、などの疑問が浮かんでくるのである。

このような事情は大多数の教師が口にし、耳にした当たり前のことである。問題とするに足りない些細な現象に見えるが、内実はそうではない。重大な意味を持つている。それは我々教師には欠点、欠陥が多いという事実である。興教大師について、我々は勉強不足であったことは否めない。しかし問題はそのような局部的、一時的なことにあるのではない。宗団（個人的には各寺院）の教化の姿勢、目的意識、教化活動の内容、将来像などの基本的問題について、現状を見直す必要があると受けとめるべきなのだ。<sup>(3)</sup> 御遠忌の意味は「宗団を根本的に再点検せよ」というこ

とである。総合調査の報告によれば、経済的基盤が強い寺院の住職は宗団の現状に問題ありと見て いる点を指摘しておこう。

宗団の基本的問題は平成二年度の布教師大会で取りあげられた「つくしあい運動をどのように再点検するか」によって方向性が見えてくるだろう。教化活動を通じて得た知見により、宗団が多面的に考察され、問題点が様々に論じられていくなかで、宗団および我々の課題が明らかにされていくにちがいない。筆者もこれまでに『現代密教』において問題提起したところである。

## 二、興教大師は何故親しみにくいのか

それでは我々の勉強不足はどこから生じたのだろうか。端的にいえば興教大師は我々に親しみにくく、分かりにくいからである、これが理由である。

第一の理由は政治がらみで親しみにくい事情がある。大師号にまつわるさまざまな妨害、中傷を思い出せばよい。それはさかのぼれば根来山の焼き打ち、さらには高野山上における院方・寺方の対立抗争の問題にまでさかのぼることである。

これは歴史的経緯であるけれども、我々は「和を尊しとする僧侶」であるがゆえに檀信徒にその実際を語れないものである。語れない背景には「祖先はありがたいものである」「おかげさまで」を押し付ける先祖の恩第一主義があり、いいかえると宗祖や中興の祖には間違いないことにつながるのである。その結果、宗団・寺院・教師に都合が悪いことは口を閉ざしてしまいたいのである。その無気力、無関心が伝統の名のもとに慣例的、習慣的な寺院経営となつて表れているといえよう。

興教大師のご生涯をどのように評価し、またその業績を判断するかは、それぞれの見解があると思われるが、筆者は興教大師は「自分の活動の拠点を確立し、真言宗に新分野を開拓し、現実的に生きた方」であると考えている。

現代の我々も興教大師を見習い、そのように生きればよいといわれるかもしれないが、寺院の現状は極めて保守的である。組織、機構も旧態依然としたところがある。したがって、頭では考へても、実行には移せないことが多いのである。実行に移せば陰口をささやかれ、足を引っ張られるだけである。ここに住職・教師の一番の悩みがあり、青年教師が目標を見失い、ヤルキを無くす要因がある。

このような末期的状況に我々の宗団・寺院は直面しているのである。この宗団・寺院の体质改善を図り、教師の意識を高めていく決め手は教化という観点である。それは住職・教師の個々の人間性、宗教的識見といつてもよい。今はそれが問われているのである。

第二の理由は思想的、教学的にも分かりにくさがある。最大の問題は、興教大師は加持身説か、あるいは新義教学は興教大師なのか、という問題である。昭和六十三年宗務総長への答申で指摘されたように教学的な解説が不十分であるといえよう。

筆者は、興教大師は真言宗に新分野を開拓したと述べたが、それは興教大師が新しい問題に取り組み、解決を図つたと強調したいからである。しかし、それは即身成仏と往生といういわば次元の異なる問題の接点を見いだすという難問であるので、その答えは分かりやすいものではない。即身成仏も往生も祖師が突き詰めたギリギリの答えである。我々の姿勢も単なる受け売りではなく、自分の問題として突き詰め、納得し、決着していくことである。そのため知的学習や体験的実習も教化活動を通じた実践的経験も必要になる。それは誰のためでもない、自分のためなのだ。自分が分かれば、たとえ誤解であったり、思い違いであったり、回りから程度が低いといわれても、それでいい

ではないか。その問題に挑戦することに意義があるのだから。自分の問題を棚に上げて、他人に説明し、理解させようすれば、一層難しいものとなり、親しみにくいものとなるのは明らかである。

智山伝法院の発足にともない、昭和六十二年度の公開講座として「興教大師とは」の総合的な特集が企画された。参加者は百名余にのぼり、末だから盛り上がりを見せた。しかしそのシリーズ第二年次には参加者が急減した。その理由や背景については会議で種々論議されたが、筆者は講師陣が参加者の問題意識、ニーズを見抜けなかつたからであると考えている。過ぎ去った事を蒸し返すようであるが、参加者つまり住職・教師にとって、その関心はテーマにうたわれたような「興教大師とは何か」である。つまり興教大師は弘法大師とどこが違うのか、我々にとつて興教大師はどういう意味があるのか、興教大師の教えを踏まえて現代の我々は何を……、興教大師から見れば現代はどうあればよいのか、などの諸問題が期待されたし、そのような質問や要望の声が聞こえたものである。

しかし、講師側としては興教大師の全体像を理解するには、その先駆となる弘法大師の理解が必要である、その問題はまた古代インドへさかのぼり、仏教史や東西の思想史の問題として明らかにしようとした。筆者にはそちらに比重があるように感じられた。講座の内容そのものには学ぶものが多大であるとしても、参加者のストレートな知的欲求を満たすことはできなかつたし、話題性を盛り上げることにもならない結果となつた。

論評では教化活動を推進する意欲につながらないし、また檀信徒を説得できない。それよりも何よりも自分自身に答えたことにならないだろう。この公開講座では教学研究者と教化実践者とには、問題意識のもち方にズレがあつて、それが参加者数に露骨にあらわされたといえるだろう。つまり教化活動の姿勢、実践の視点が明確でない点に、寺院経営や教化活動の理念があきらかでないところに、講師側にも参加者側にもお互いに不満足な結果となる一因があつたのである。それを解く鍵は、伝統的教学と教化つまりこれから的新しい教学の視点は何か、あるいはその接点

はどこにあるかについて、見当することである。

後に述べるようにこの解答は「つくしあい運動で示された理念およびそのための実践体系」を各方面から検討することによって見いだされるだろう。これまでに教学と教化との違いや接点は検討されてきたが、一次的には、テーマに取り上げて検討した点に意義を認め、これからは新しい角度から検討すべきではないか。

教化活動はこれからの教学の構築のための基礎作業である、として考えを進めよう。

我々にとって新しい教学（伝統的教学ではない）とは、何を目標とし、何をしていくかを論点として、現状の伝統的教學（その教育体系）のありかたを検討していくほうが生産的である。その引き金になるテーマは、同和問題、寺庭婦人の問題そして檀信徒の参加の問題である。つまりこれらは伝統的教学では話題にならなかつたテーマであり、現代の我々でなければ取り組めない新しい課題なのである。

次に事相関係で分かれりにくい点もある。それは興教大師が衣の中で結ぶいわゆる秘印である。その秘印はどのように結ばれているのか、その意味は何かである。筆者は事相方面には無知であるがゆえに直感的な発言をすれば、いわゆる非内縛非外縛印で、それは両部不二を意味するのではないかと見当をつけているのであるが、ご教示を賜りたい。

また法流の問題であるが、興教大師の伝法院流は幸心流にどのように継承されているのか、血脉でどう位置づけられているのか。これらの疑問に對して事相関係者の口は重い。「事相に新古はない、教相には新旧がある」といわれ、事相本山、教相本山と別れてきたらしいが、これもおかしなことである。

筆者は、ある考え方（教相）を具体的に形式や行為として表した儀礼・意識空間を事相と考えている。例えば、尊敬や帰依という心情が合掌する姿となり、怒りは拳骨を振りかざすと考えればよい。したがつて、基本となる考え方が異

なれば、その形式も行為も変わるはずである。事相は事相、教相は教相と分離していられるだろうか。それがそのまま疑問をもたないのではおかしいではないか。より積極的にいえば、事相はよりバラエティーであってよいはずである。同じ礼をするにしても起居三礼もあれば、五体投地もあるのであるから、その修行者の独自性を尊重すべきではないか。ただし、基本的な実習段階では形式化、定型化した手続きが要求されることはいうまでもない。問題はその指導者にある。既に伝法院の事相研究室では「事相とは何か」をテーマに研究や討論会が開催されているので、今後を期待したい。

第三の問題は、教化活動の理念として提示された「つくしあい運動」と御遠忌の関係である。この点も昭和六十年総長答申で指摘されたところであるが、「つくしあい運動」およびその理念のもとに、南無大師遍照金剛の唱和に重点がおかれ、実践され、それが定着してきた。それを急に南無興教大師に方向転換することはできないし、また檀信徒には何故そうなのか分かりにくいとも指摘されている。

たしかに「つくしあい運動」の主体となるのは弘法大師であり、そこでは興教大師は比重が小さく、位置づけも薄弱である。宗団の教化路線と御遠忌との問題は弘法大師一千五百五十年御遠忌にも指摘されたことであるが、通常の活動に御遠忌という特別期間、特別テーマをプラスして取り組めばよい問題として了解されたと記憶している。

今我々が取り組むことは興教大師の八百五十年御遠忌という特別な事業である。御遠忌であるからこそ、興教大師に焦点をしぼり、重点的に取り組むのだと考えればよいであろう（それは宗団を点検することでもあると前述した）。ただし、こう割り切るには多少の勇気が必要である。弘法大師と興教大師とは違いも多々あるのである。一方を主とすれば、他方は従とならざるをえない。だからこのような煮え切らない事態になつていることも事実である。この点もあまえて今回の御遠忌では「宗団の基本、原点」を十分に検討することが急務である。弘法大師が未開

の分野を切り開いた開拓者とすれば、興教大師は構成の後継者としてその遺産、資産をどのように再開発し、活性化したか、が問われたのであるから、我々はその再開発、活性化の視点に着目する必要がある。その一は往生の問題である。何故、往生に注目したのか、その意義が論議されるべきである。それはいわゆる世間のニーズ、時代の思潮を鋭敏に感じる問題意識としておきたい。

以上のように興教大師が親しみにくい、分かりにくいという背景には政治的、思想的、教化活動上のさまざまな問題があることがわかる。<sup>(4)</sup> それ以上に親しみにくくしている理由は「我々にとって興教大師とは」の問いかけが希薄であるからである。極論すれば興教大師が我々の前にいなくても、寺院は動いているのである。現状に安住していることこそ危機感の危機感たるゆえんである。

特集興教大師研究で各氏が所論を発表してきているが、筆者もまた教化実践の立場から現状の問題から考察を進めてみよう。教化実践の立場とは、いかに生きるか（そして死んでいくか）という問い合わせを基本とし「私にとっての」答えを見いだしていく営みであり、それは実践を通じて確かめられていくものである。その時、興教大師は我々に何を語るか、いわば興教大師の読み方といつてもよい。

これが筆者の学び方である。自分の現実に即しながらとは主観的な問題が含まれるのであるが、その現実を批評的、批判的に考察しなければ、教化活動は現場のニーズの問題に終わることになる。ここに教化の問題が伝統的教学と乖離してきた背景がある。

### 三、興教大師が直面した問題は何か

まことに都合のよいことに興教大師は自分の前半生を略述した『述懐詞』を残している。それを手掛かりに転機の

要点をたどってみると、まず八歳の時大日如来になろうと志したこと、十三歳で京に上り出家したこと、二十歳で高野山に登つたこと、二十八歳で新しい問題に取り組み始めたこと、以上の四時期が転換期といえるだろう。

後世の研究者が、興教大師が直面した最大の課題は浄土教であるとすることに異論はないが、それは内容上の結果的な問題とすべきであろう。むしろ興教大師の内面を探れば、興教大師はそれぞれの転機で「自分とは」という根本的な問題に直面したと考えるべきではないか。そこではどのような内面的格闘が行われたのか、人格形成における発達課題として問題点を指摘すれば次のようであろう。

まず八歳のこどもには、父親とはいがなる存在か、こどもが親の背に見いだす心理を考察する必要があろう。残念ながら仏敎教団においては沙弥以前の年齢、こどもには出家が許されなかつたのであるから、こどものテーマは未開拓であり、今後の課題となる。

十三歳という年齢は、自分の将来の可能性を問いかける年齢といってよい。この意識は十六歳から十八歳へかけて出家・得度し、四度加行の修行を通じて、自分こそ真言宗の僧侶であるという意気込みと不安などの人生の問題につながるであろう。

こうして自分の進路を展望し、二十歳で高野山に登つた興教大師が見たものは何か。心の片隅には真言宗の青年修行僧として意氣揚々としたものがあつたにちがいない。しかし、高野山上で思いもかけない人物に出会つた。阿波の上人・青蓮である。興教大師は自分とは別世界に生きる人々の存在と別の次元の生き方に当面したのである。

執拗と思われるほど繰り返された虚空藏求聞持法の修行は何を意味するだろうか。青年・興教大師をそこまで追い込んだ理由があつたはずである。弘法大師を追慕し、その修行の軌跡をたどつたのだという字義上の説明だけですむだろう。(5)

むしろ、高野山上のひじりが実習していたであろう「念佛の実習」の内実・効果を探っていたのではないか。ひねくれた見方をすれば、真言宗の行法が本物かどうかを試したのだと勘ぐることも、どこがどう違うのか、悩みに悩んだ末のことであるということもできよう。後に真言念佛の提倡に至る念佛の意味がこの時点で確かめられていたと考えてもよいであろう。伝記によれば、求聞持の法は糺余曲折の末にある師の伝授によってたちまちに成就する。この伝承には「大師は正統を繼承している」という本流意識が反映されているのであるが。

こうした厳しい修練の後に『述懐詞』に述べるように、二十八歳でいわゆる淨土往生の問題に直面したことになる。それは終生の大問題となつた。一般的にいえば自分の進路を見極め、自分が果たすべき仕事、役目を確信した年代である。伝記では興教大師はこの年に悉地を得たといふ。

こうして淨土往生の問題は興教大師の生涯の課題となつた。それはテーマでいえば、即身成仏か淨土往生かという大テーマである。本尊でいえば大日如来か阿弥陀如来か、時間でいえば現世か來世か、場所でいえばこの世かあの世か、人間存在の本質論でいえば菩提心・善か煩惱・悪か、それはまた自力か他力かなど二律背反する問題である。

さらに真言宗内部の問題、教学上の問題についても新しい問い合わせが試みられる。今まで並列的に論じられてきた大日經的世界觀および金剛頂經的世界觀の二つに対して、それらを統合する体系化が図られたことである。つまり行法でいえば阿字觀あるいは月輪觀に代表される両系統に新しい理念を加えて一步踏み込んだ解釈を立てたのである。このような相反する両極端に位置するテーマに興教大師は取り組んだのであり、何らかの答えを見いだしたものと筆者は考えるのである。弘法大師の即身成仏論を基礎に、自分なりに納得のいく答えを模索し、自分の思想、宗教、儀礼に体系化を図つたといえよう。しかし、既に述べたように相反するテーマであつたがために、どちらかに論拠をおいて考察する我々には分かりにくいものもある。

第二は組織、機構についていえば、宗教界における高野山の位置づけの問題がある。真言宗内では東寺、高野山そして新興の仁和寺、仏教界では南都の仏教界および天台そして新しく流行ってきた浄土教の抗争である。あるいは當時各地に靈場寺院が隆盛を極めていくなかで真言宗諸寺院の将来はどうなるか、政治的な問題にも迫られていたと考えられる。例えば、伝法会の再開は真言宗の教学研鑽の伝統を再開し、真然大徳の流れに添う本流意識があつたであろう。いずれも予測に過ぎないが、それに加えて、奈良三大会に匹敵する伝法会として大成し、仏教界における指導的地位を目差したと見ることもできるだろう。伝法院を高野山上の活動の拠点とし、伝法会をその組織・人脈作りの場としたものと理解しておきたい。

自分とは何か、自分の拠点はどこか、これは現代の我々も避けられない問題である。興教大師は平安末期に、浄土教という試金石から自分なりの回答を探し出したのだ。

興教大師に取り組む我々の視点や姿勢についても何を解決したかではなく、「何が問題なのか」「何故問題であったのか」「何故問題としなければならなかつたのか」に路線を変えてみようではないか。教学的に知識的に知つていている領域ではない。人々の関心はどこにあつたのか、これがテーマである。したがつて我々は「成仏か往生か」の各論を論じる前に、「当時の人々にとつて救いは何か」「人間は死後どうなるのか」の総論を研究すべきなのである。ある人はいうだろう、それでは真言宗の立場がなくなると。しかし、当時の興教大師にとつても、それは新しい問題であり、未開の分野であった。それは今の我々も同様である。

今日の我々は大学で即身成仏を学び、卒業後は葬式を執行している。当たり前のことである。しかし、興教大師にとって、また当時の真言宗の僧侶にとつては、初めての重大な問題であった。臨終に不動明王の真言を唱えながら往生していくかずかずの往生伝が残されている。それは自己への必死な問いかけであった。

#### 四、我々が直面している問題は何か

八百五十年御遠忌はご法事なのであるから、ありていにいえば、故人を偲びその生涯の軌跡に学ぶことである。そこで筆者は興教大師について不透明の諸点を指摘し、その鍵を考察してきた。方法的には自分史という観点から『述懐詞』を取り上げ、興教大師のご生涯の転機とその心理を考察した。特に人生の転機に焦点を当てるによつて、我々の課題が浮き彫りになったものと思う。

我々が避けてとおれない問題に直面したとき、その回答を祖師である興教大師から学んでみた。祖師の生き方に学ぶというテーマもこの理由からだらう。「法は人によつて弘まる」というテーマを実証することでもある。

このようなことなら、何故興教大師でなければならないのか、違う人でもよいではないかといふ声があがるにちがいない。しかし今は御遠忌という特別な場合である。我々の先人が仰いできた祖師・興教大師の生涯をたどつてみると必要があるので。それは先人が祖師と仰いだゆえんを考察することにつながる。その研究調査を通じて我々が見落としていた問題を発見することになる。その作業が宗団を結ぶ糸になるにちがいない。このことは御遠忌のハード面を執行するまでのソフト面の問題である。人的、組織的には内部の基礎作業である。この点も御遠忌の意義の一つである。

そこで本論のまとめにかえて、我々自身が直面している問題は何かを検討しておきたい。その一は「教化とは何か」の共通理解である。それは寺院とは何か、といいかえててもよい。伝統的なこれまでの寺院という意識を大逆転する発想が必要である。

我が身は大きいなるいのち・大日如来から授かつたいのちである、この問題を理解し、納得していく方法は、現代寺

院では教化活動をおいて外に考えられない。一人山にこもつて修行するつもりなら、檀信徒は必要ないのである。原典研究を志すなら大学や研究所に勤務すればよい。修行や研究そのものを否定するものではない。むしろ必要なのである。問題はそれらが絶対者であり、独尊であることを疑問視するからである。檀信徒が目の前に存在するのである。視野を広げれば寺院の周りに人々が存在することを重視すべきなのである。

一寺院を単位に、一住職で行える伝統行事を教材の場とした「つくしあい運動」が動き出そうとした。我々の将来の進路は教化活動であり、そこに活路を見いだした先輩諸兄には敬意を惜しまないものであるが、しかし、当時としては何故檀信徒なのか、その意義は何かまで論及されていない。檀信徒の寺院参加はいわゆる大衆化、庶民化ではない。檀信徒をメスに宗団や寺院を検討すると、今まで隠れていた問題が次々に浮かんでくるのである。それが檀信徒に注目する理由である。それは同和問題をテーマにしても、寺庭婦人をテーマにしても同様である。宗団・寺院の硬直化、教育の形骸化など様々な深刻な問題が山積していることに気がつくのである。

次に、教化活動の基本は「いのちとは」の問題であると述べたが、それを意識した時、派生する問題は生命の問題であろう。宗教的ないのちと医学上の生命とでは次元が違う問題であるが、今日では宗教者の発言が待たれていることは周知である。本宗でも臓器移植、脳死の問題をはじめとする新しい問題について調査研究が急がれるべきであろう。答えが出ない問題であるにしても、分からぬ、知らないではすまされないだろう。医学的、あるいは法制上の諸問題は他に学ぶとしても、人間の生き方としてどうなのか、人間の救いとは、については発言せざるをえないだろう。科学技術の最先端の問題にたいして、最も素朴な答えが求められているのである。

さらに、いのちの問題は「基本的人権の問題」につながる問いかけである。今日的な意味での自由や平等あるいは人権の考えが古代インドの仏教や真言宗にはなかつたことは既に指摘されている。しかし、基本的人権に関わる「差

別事件」について我々は座視していられるだろうか。仏教が智慧と慈悲の宗教であるなら、基本的人権を損なわれ、そのため差別され、虐待され、命を失う人々が現在もいるという事実に無関心であつていいのだろうか。我々の課題は、基本的人権の由来を論議することではなく、我々が生活していく上での不当な待遇、社会の不条理を問題としていくことであろう。

同和問題は当面する大問題である。同和問題も、我々にとつては宗団・教学や寺院の体質を洗い直す良薬になるに違いない。他から押し付けられた問題のように見えるが、その実際は我々の存続に関わる根本的な問題なのである。こうして現代社会の様々な問題について調査研究がこれまで以上に必要となるだろう。

しかし、今の我々にそれだけのエネルギーとパワーがあるだろうか。あるいはその根拠や活動の拠点はあるのだろうか。

そこで我々の第二の課題として、我々の活動の拠点はどうなっているのか。

回りくどくなるのであるが、このようにして一つ々々確かめ、納得していく手続きが必要なのである。何故なら、我々寺院に關係するものは保守的な閉鎖的な体制の中に生きている。どうしても現状維持、現状追認になりがちである。伝統至上主義のゆえに激変に变化する社会の動向に遅れてしまいがちである。

既に述べたが、寺院にとって檀信徒の存在する意味は何かを検討しておこう。檀信徒は住職の理解者、支持者、後援者である。その裏付けは教化活動であることはいうまでもない。現代社会で檀信徒と宗教の関わりをみると、信教の自由、政教分離により義務教育をはじめとして宗教教育は行われていない。檀信徒は宗教的に白紙の状態にあるのだ。したがつて他の宗教が手を伸ばす余地がある。そこで他の宗教からの誘惑を退けるという防御意識から教化活動が行われることも事実であろう。しかし重要な点は宗教あるいは信仰をもつことの意義が教化活動を通じて理解され

ることである。檀家から信徒へのかけことばもこの点を予想したものであろう。詳しくは別紙としたい。

その三は宗団の課題とは何か、宗団を結ぶ絆は何か。

答えは、教化という意識が宗団の基本であり、宗団人を結んでいくのである。

ところが現在の我々はこの基本的な姿勢が共通理解されているだろうか、問われなければならない。あるいは諸条件が整っているだろうか。経済的基盤、地域差の問題は既に指摘された。さらに寺院のありかたを問題にすれば、出家・妻帯の問題は手がつかないままである。この問題も新しい角度から検討すべき課題である。現代の寺院の宗教性、社会性、さらに地域社会における経済の問題など多角的に研究されるべきである。さらに寺院における寺庭婦人の位置づけも後の課題である。これらは寺院個々の問題ではあるが、宗団として取り組まなければ、宗団という連帯も教化活動推進の連携もない烏合の集団となるだろう。

宗団の課題として、しかも第一の教化とはの観点から寺院の条件整備を進めるべきである。特に条件整備の中でも、教育に関わる諸事項は内容的にも実施形態にも制度上でも緊急に取り組まなければならない時期に来ている。

ここで内容的という意味は、一義的な教理解釈の問題ではすまないぞ、という意味である。社会の諸問題に関わって摸索された研究あるいは教化活動の実践で直面した諸問題から得た知見を含んでいる。経典は、その時代その社会で直面した問題に対する回答集なのである。『大日經』もまたその一事例なのだ。

このようにして教化活動を主題とする各種の研究会、研修会が開催されることによって、我々の意識が方向転換し、宗団の体質が改善されていくことになるだろう。総長への答申は《論議の再興》を呼びかけているが、その論議の内容、主題は、教化研究室が試みてきた地方教化研究会のようなテーマから始められていくだろう。そしてはじめていわゆる教学と教化との乖離が避けられる。その成果の一端を子弟教育にどう反映するかは、宗立大学といわ

れる大正大学の問題となる。人間の生き方を問う素朴で根源的な発想と学術的研究の諸方法に期待するばかりである。

以上の課題は、どの一つであれ難問である。しかし、我々は、いかに生きるかそしていかに死んでいくか、この誰にも共通する土俵に既に立っているのだ。そのためにも、我々は実践と体験に基づく宗教的知見を開発していく必要がある。そうして内外の叡知を結集していくのだ。その叡知を結集する場が現代の寺院つまり伝法会である。

## 註

(1) この実際については、小宮一雄編集『宗祖弘法大師千五百十年御遠忌紀要』真言宗智山派発行、平成二年十月参照。

(2) 『智山教化研究』十九号参照。

(3) 弘法大師の教学に立脚するとはどのようなことか、と題して広沢隆之「宗教的權威への対応—覺鏡上人による教学的立場への解釈—」『現代密教』二号十一頁参照。

(4) 小室裕充氏は、葬儀とともになつて行われる念佛（光明真言、十三仏念佛）が教学的に評価されず、習俗、俗信とされて研究が不十分であること、あるいは前回の御遠忌は戦争と重なったことなども、興教大師の理解不足の一因となつていると、研究室研究会で指摘。

(5) たしかに「大願を立て申す事等」「求聞持願文」には、その動機のがべらされている。